

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：13401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26580061

研究課題名(和文)「空飛ぶ円盤」とジャン・コクトー 「超科学」が文学に及ぼした影響に関する研究

研究課題名(英文) Jean Cocteau and the Flying Saucer: A Study of the Influence of Pseudoscience on Literature

研究代表者

松田 和之 (MATSUDA, KAZUYUKI)

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門(総合グローバル)・教授

研究者番号：50239026

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：コクトーの文学・芸術について考察する上で重要な手掛かりとなるのが、彼が晩年の12年間に書き残した膨大な分量の日記で構成される『定過去』だが、そこでは、「空飛ぶ円盤」や「前衛考古学」など、いわゆる「オカルト」として学問的な考察の対象から除外されがちな話題が数多く取り上げられている。本研究において、その背景を慎重に探った結果、エメ・ミシェルをはじめとする在野の若い学者たちとの交流を通じて現代物理学に異議を唱える「超科学」の思想に共鳴したコクトーが、UFOや超古代文明の存在を肯定的に捉える彼らの思想で以て自らの時間観・死生観を理論武装しようとした可能性を指摘するに至った。

研究成果の概要(英文)：When reading Cocteau's intimate journals (1951-1963) published posthumously under the title "The Past Defined", one may be surprised to find frequent references to occult themes such as flying saucers (UFOs) and pseudoarchaeology (such as the existence of Atlantis and Mu). How should we understand these themes and the true intentions of the author? It is not easy to provide a definite answer to this question, but at least it may be pointed out that in his later years, Cocteau had a great deal of sympathy for young pseudoscientists who objected to the theories of modern physics. There is no denying that the poet was under the influence of pseudoscience and closely related occult themes.

研究分野：フランス文学

キーワード：コクトー 超科学 空飛ぶ円盤(UFO) 前衛考古学 オカルト

1. 研究開始当初の背景

芸術のさまざまな分野で多彩な才能を発揮したフランスの詩人ジャン・コクトー (1889-1963) の文学・芸術について考察する上で重要な手掛かりとなるのが、彼が晩年の 12 年間に書き残した日記から構成される『定過去』*Le Passé défini* である。この日記集が著者の死後に公刊されることを念頭に置いて書かれたものである点に留意したい。報告者は、平成 20 年度から 2 年計画で「晩年のコクトーが残した教会美術作品に関する図像学的な調査・研究」(科研費：萌芽研究 20652025) を行った際に、得られた調査結果を裏付ける目的で、歴大な分量から成る『定過去』の読解に着手した。その際に驚かされたのは、「空飛ぶ円盤」(UFO、OVNI) や「前衛考古学」など、いわゆる「オカルト」として学問的な考察の対象から除外されがちな話題がそこで数多く取り上げられていることだった。

それらの記述が単なる興味本位の内容にとどまらず、「空飛ぶ円盤」の存在や「前衛考古学」の正当性が強い確信を以て主張されている点は注目に値するが、従来、国内外を問わず、コクトーの文学・芸術に関する研究において、そうした諸々のオカルト的なテーマが取り上げられることはなく、研究者の間では、それらを、いわば見て見ぬふりをする傾向が顕著に見受けられた。また、オカルト的な話題に関連してコクトーはしばしば現代物理学に異を唱えた「超科学」の知見に言及しているが、従来、「超科学」という観点から彼の時間観や死生観に学術的な光が当てられることも、やはり皆無であったと言ってもよい。

本研究は、「超科学」の思想に注目しながら、従来「オカルト」のレッテルを貼られて等閑視されてきた「空飛ぶ円盤」や「前衛考古学」に関するコクトーの見解に先入観を排した客観的な分析を加え、それが彼の時間観

や死生観に、さらにはその文学と芸術に及ぼした影響を解き明かそうとする試みである。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、歴大な分量の日記群である『定過去』を、『知られざる者の日記』をはじめとするコクトーの他の著作や「超科学」の動向に関する書籍をも随時参照しながら、時系列に沿って分析的に読み進めてゆくなかで、特に以下の 3 点に関して然るべき成果を上げることにあつた。

(1) 『定過去』における多様な「オカルト」関連の記述の中で質量ともに双璧をなすと言ってもよい「空飛ぶ円盤」と「前衛考古学」に関するコクトーの見解を把握する。

「空飛ぶ円盤」は「オカルト」の分野を代表する事象として広く知られているが、「空飛ぶ円盤」とともにコクトーが『定過去』において好んで取り上げた「オカルト」の話題が、いわゆる「前衛考古学」に関するものだった。世界各地に残されたさまざまな古文書や伝承を基に、太古の時代に現代文明をも凌ぐ高度な文明が存在していたことを証明しようとする研究分野が「前衛考古学」であり、そうした超古代文明を「空飛ぶ円盤」に乗って飛来した異星人によって生み出されたものと捉える向きもあることから、これら二つのオカルト的なテーマは、同じ文脈で語られることも多い。だが、いずれも疑似科学の範疇に属するものと見なされ、アカデミックな研究分野として認知されることはなかった。これらのテーマに関して該博な知識と一家言を持っていたコクトーは、あたかも後世の読者に謎をかけるかのように、自らの死後に公開されることになる日記にその一端を繰り返し書き留めたのだった。「空飛ぶ円盤」や「前衛考古学」に関するコクトーの認識やそ

れを支える彼の時間観や死生観を無視して、その文学・芸術を正しく理解することはできない。本研究は先ず以て、コクトー研究におけるブラックボックスの感すらあるこれらの領域にスポットを当てることを目的とする取り組みである。

(2) 「空飛ぶ円盤」や「前衛考古学」を肯定する上での理論的な根拠とされた可能性がある「超科学」に関して、コクトーの理解と共感の度合を測りながら、晩年の彼の思想（時間観や死生観）との連関を探る。

コクトーは自らの芸術の本質である「詩」を「厳密な科学」と定義し、その「科学」がアカデミックな現代科学ではなくオカルト的な扱いを受けてきた「超科学」にほかならないことを標榜していた。彼の時間観や死生観を特徴づける「超科学」という視座からコクトー研究にアプローチする意義は大きいと言える。ともすればオカルト的な色彩を帯び、文学研究の題材として取り上げるのが憚られるテーマではあるが、先入観を排してそこに客観的な分析のメスを入れることで、得られるものは決して少なくないはずである。

(3) コクトーと「超科学」を繋ぐキーパーソンであり、晩年の詩人が絶大な信頼を寄せていた在野の科学者エメ・ミシェル（1919-1992）に注目し、その面妖で突飛な思想に関して理解を深める。

ピカソ、ストラヴィンスキー、サティ。いずれもコクトーがその才能に心酔した芸術家たちであるが、晩年の詩人が彼ら以上に高く評価した人物がエメ・ミシェルだった。舌鋒鋭く同時代人を評するコクトーが「最も明晰な精神の持ち主」と讃えたミシェルだが、フランスにおける

UFO 研究の草分けというレッテルが貼られたことが災いしたのか、彼の思想が学術的な研究対象とされることは、従来ほとんどなかった。コクトーとの接点を通じてミシェルの人と思想に光を当て、この異能の学者の再評価に向けて一石を投じることも、本研究の目的のひとつに挙げられる。

3. 研究の方法

「空飛ぶ円盤」や「前衛考古学」は、その性格上、アカデミックな学者・知識人は言わずもがな、奔放な想像力で勝負できる作家や詩人たちにとってさえも、安易に公言することが憚られるテーマであったと言える。1955年にアカデミー・フランセーズの会員となったコクトーも例外ではなかったはずである。だが、彼には、世間体を気にすることなくそうしたオカルト的なテーマを取り上げることができる場があった。自らの死後に公表される日記集『定過去』がそれである。

全8巻、計5000頁にも及ぶこの大著を、文学テキストとして読み込むのではなく、必要な情報を抽出するための情報源として取り扱う点に、方法面における本研究の特徴を指摘することができるが、詩人の没後二十年にあたる1983年に開始された刊行が完結するまでに30年もの年月を要している事実が、この日記集を研究対象とすることの難しさを暗に物語っているように思える。老いの繰り返り言にも似た記述や極めて私的な感情の吐露には読者を当惑させるものがあり、それに加えて、報告者はしばしば本研究のテーマとは関係しない多種多様な話題に惹かれてつい読み耽ってしまったがために、情報の抽出作業は思うように捗らなかった。そこで、平成27年度以降は、それまでのように時系列に沿ってつづさに読み進めてゆくのではなく、「空飛ぶ円盤」や「前衛考古学」に関連するキーワードに注意を払いながら思い切った飛ばし読みをすることで、作業の遅れを

取り戻すことにした。

主たる研究対象となる『定過去』に加えて、時間と空間に関して現代物理学の成果とは一線を画する独自の持論が展開されているコクトー晩年の評論集『知られざる者の日記』*Journal d'un inconnu* (1953)の「距離について」«*Des distances*»の章やエメ・ミシエルの2篇の代表的著作をはじめとして、書籍のみならずインターネット上の情報をも幅広く渉猟する点において、本研究は基本的に文献研究であると言えるが、フランスにおいて「超科学」関連の文献の閲覧や希少な書籍・資料の収集を行うとともに、コクトーの教会美術作品におけるオカルト的な要素の有無を検証するための現地調査を実施するなど、その研究方法にフィールドワーク的な要素を組み込むことで複眼的な視座を確保し、研究が机上の空論に陥ることがないように工夫を心がけた。

4. 研究成果

上記した「研究の目的」の(1)~(3)はそれぞれに連関し合うものであるため、研究成果との対応関係を明瞭に示せるわけではないが、強いて言えば、研究期間内に目に見える形での成果が得られたのは、主として(1)に関してであった。(2)については、(1)の研究成果を踏まえて考察を深めることになるため、(1)よりも長いスパンで考える必要がある。本研究の成果として挙げられる研究論文の中には、過去の科研費研究によって得られた知見や仮説に本研究を通じて肉付けがなされることで形を成したものも含まれているが、(2)に関しても、今後の研究に受け継がれてゆくなかで目に見える成果が上がることが期待される。(3)については、今回の研究ではエメ・ミシエルの人と思想をコクトーというフィルターを通して理解する段階に止まってしまった感は否めないが、今後の本格的なミシエル研究への足掛かりはつかめたように

思える。現時点で指摘できる本研究の具体的な成果は、以下の5項目に分類できる。

「空飛ぶ円盤」について

『定過去』から「空飛ぶ円盤」に関連した記述を抽出するとともに、それを集団催眠による心的現象と捉える当時の一般的な解釈に異論を唱えたコクトーのUFO観をより正確に理解するために、スイスの心理学者ユングのそれとの比較考察を試みた。その結果、時間を「遠近法によって引き起こされるひとつの現象」と捉えていたコクトーが、「空飛ぶ円盤」搭乗者がスペーストラベラーではなくタイムトラベラーである可能性にも言及するなど、UFO現象をあくまでも物理的な現象と見なし、彼独自の時間観によってそれを説明づけようとしていたことが確認された。

「前衛考古学」について

数あるオカルト的なテーマの中でも「空飛ぶ円盤」とともにコクトーの心を捉えた「前衛考古学」に関して、アトランティスやムーといった超古代文明に関する言及や、その存在の証とされる出土品や伝承品、今で言うところの「オーパーツ」に関する言及、さらにはロシア出身の精神分析医イマヌエル・ヴェリコフスキーの名著『衝突する宇宙』とそこで展開された彼独自の天変地異説への言及までもが『定過去』においてなされているが、それらを詳細に検討した結果、こうした話題が単に興味本位で取り上げられているのではなく、専門的かつ系統的な知識に裏打ちされたものであり、コクトーが前衛考古学と軌を一にする見解を自家薬籠中のものとしていたことが明らかとなった。彼がそうした知識を入手した経緯や情報源の問題にも踏み込んで考察をめぐらせ、研究論文を通じてその成果を公にした。

「超科学」=「左翼の科学」とエメ・ミシエルについて

現代物理学に代表されるアカデミックな科学に反旗を翻した「超科学」を牽引する在野の若い学者たちにコクトーが共感を示し、時に自らの知名度を活用して彼らをバックアップしていたこと、そして「超科学」の考え方が、彼が「空飛ぶ円盤」や「前衛考古学」を肯定する上での根拠になっていたことを、『定過去』の中で用いられている「左翼の科学」という言葉に着目しながら、多角的な視点から論証した。加えて、エメ・ミシエルに関する記述を『定過去』より抽出・分析することで、彼がコクトーと「超科学」の連関をより深く掘り下げて理解する上でのキーパーソンの役割を果たす人物であることが、改めて確認された。

過去の科研費研究を継承する研究成果について

渡仏時に行ったフィールドワークの成果を基に、コクトーの教会美術作品にしばしば描かれる「眠る兵士」のモチーフが持つ意味を考察し、そこにギリシャ神話の牧神のイメージが投影されていることを論証するとともに、平成23年度から26年度にかけて行った科研費による研究の成果に本研究の成果を加味し、彼が晩年に制作したカトリックの礼拝堂の装飾に古代エジプトに特有の表象が密かに盛り込まれていたことを明らかにした。それぞれの研究成果をまとめた研究論文は、いずれも、コクトーの宗教観や死生観を理解する上で、その鍵を握るのがサンクレティズム(宗教的習合)という考え方であることを論じるものになった。

また、『定過去』を読み進めてゆく過程で、反知性主義を標榜するコクトーが知識人やマスコミに対して多大な嫌悪感を抱いていた事実が確認されたが、それが、彼の映画『美女と野獣』と歌舞伎の演目『鏡獅子』との秘

められた関連性を考究した論考の重要な論拠のひとつとなったことをも、付言しておきたい。

日記研究の方法論について

本研究では、日記を、それを綴った作者の心の機微に思いを馳せながら読む読み方、つまり、日記を文学作品として読む読み方ではなく、特定のテーマに関連する情報源として読む読み方が求められた。日記から求める情報を効率よく引き出すためには、関連しない要素を思い切って切り捨てながら読む必要があるが、そのためには、紙媒体から成る日記集の電子データ化が有力な手立てとなることに思い至った。検索機能を使えば、電子データ化された日記からトピックごとに情報を抽出することができる。それらを項目別に分類することで、日記集を再編集することも可能となるだろう。文学研究に日記を活用するための方法論の開拓への道筋をつけることができた点も、本研究の成果のひとつとして挙げられる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

松田和之、コクトーと古代エジプト サン=ピエール礼拝堂の「目」の意匠に関する一考察、GALLIA 第56号、査読有、大阪大学フランス語フランス文学会、2016年、81-90頁。

松田和之、ジャン・コクトーと「左翼の科学」 超古代文明、アトランティス、そして「空飛ぶ円盤」、福井大学教育・人文社会系部門紀要第1号、査読無、2016年、77-93頁。

松田和之、コクトーの教会美術作品に描かれた「眠る兵士」に関する一考察、福井大学教育地域科学部紀要第6号、査読無、2015年、75-105頁。

〔図書〕(計1件)

MATSUDA, Kazuyuki, *La Belle et la Bête et Kagami-jishi in Jean Cocteau et l'Orient, Cahiers Jean Cocteau 16*, Comité Jean Cocteau pour les œuvres de Jean Cocteau, Éditions Non Lieu, Paris, 2018, pp.150-173.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

松田 和之 (MATSUDA, Kazuyuki)

福井大学・学術研究院 教育・人文社会系
部門 (総合グローバル)・教授

研究者番号 : 5 0 2 3 9 0 2 6